

〔報告〕 変容する大学と学生生活

「12大学・学生調査」を分析する

上智大学文学部教授  
武内 清

私たちの共同研究の成果をもとに、今の大学生の現状についてまとめてみたいと思います。全国の4年制大学12校を対象に実施した「12大学・学生調査」の、97年と03年のデータを比較しながらお話しします。調査対象大学は国立5校、私立7校。主に文系の学生の生活を調査しています。

18歳人口が減少し、文部科学省や各大学の大学改革が進んだことにより、大学の置かれた状況に変化が生じています。大学・短大への進学率も現在は5割近くになり、従来入ってこなかったような学生も大学に入るようになりました。学生の量的な変化に伴い、大学も大きく変化

しています。学歴社会が揺らぎ、就職難になっていることも学生たちは敏感に感じ取って、学生生活もそれに伴って大きく変わりました。

学生自身の価値観も変わってきています。基本的に、従来言われていた「大学レジャーランド」という状況からは大きく変容してきているのではないかと思います。

たとえば必要な授業だけは出席し、あとは遊びや交友などに楽しみを見いだすというのが、一昔前の典型的な学生でした。77年には社会学者の副田義也氏が、『嗚呼!!花の応援団』という漫画の学生生活の様子を分析しています。ここに登

場する応援団は、応援の練習はしても実際に応援に行くわけではなく、1年生は上級生の使い走りや掃除、電話番号などをして一日を過ごします。しかし、彼らが大学へ行く意味はあるのでしょうか。彼らの仕事ぶりを、副田氏は「時間の浪費の制度化」と表現しています。つまり、若者が時間を浪費できる大学という制度があるからこそ、若者の失業問題も犯罪も少なく、社会は安定しているというわけです。この時代「レジャーランド」といわれた大学の、典型的な形です。このような学生生活は20年ほど前から続いていたわけですが、最近が変わってきたのではないかと思います。

真面目になり、「生徒化」する学生 ― 97年と03年の学生の比較 ―

大学生活は「遊び」から「勉強」志向へ 全体的には、勉強から離脱したり「分数ができない」などと言われたりした、いわゆるレジャーランド型の学生に変化の兆候が見られ、大学生の関心が、遊びから勉強や資格取得にシフトしていることがデータからうかがえます。具体的には「授業への出席率」が「80%以上」と答えた学生が、97年の62・6%から03年の67・1%に増加しました。女子学生や1、2年生の出席率は以前から高かったのですが、最近男子学生と3、4年生の出席率もよくなりました。

「授業への評価」では、「授業全般に対する満足度」が6年間で24・9%から27・7%に増加しています。「面白い授業がある」「少人数・ゼミ形式の授業がある」「専門的な知識が得られる」「幅広い知識が得られる」「先生が授業に熱心である」という項目すべてにおいて、評価が高まりました。「施設・設備への満足度」も、部分的に6年間で10ポイント以上増加しました。快適な学生生活を目

ざす大学側の配慮の成果でしょうか。

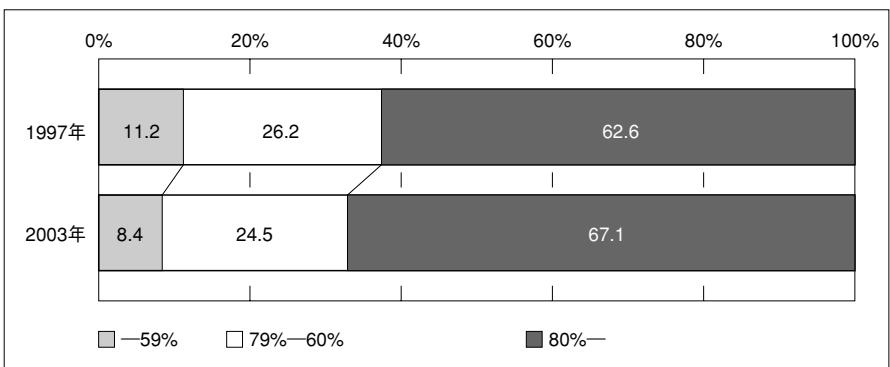
「大学生活の満足度」も全項目で高まっています。「大学観」の調査では、97年は「大学は学問よりさまざまな体験をする場」という回答が約6割ありましたが、03年は「大学は学問の場」という回答と、ほぼ半々でした。授業については「もっと出席を厳しく取るべき」が9・3ポイント増え、教員からもっと厳しく指導してほしいという要求が高まっています。学生の自主性に任せるよりも「大学の先生は指導したほうが良い」という回答は、6年間で倍増しました。

学生の「生徒化」、大学の「学校化」

これらの結果を見ますと、最近の学生が「出席重視」「勉強志向」「教員の指導」「実学」を期待していることが分かります。大学生が真面目になったとも言えますが、これは「生徒化」したとも言えるのではないのでしょうか。

生徒化というのは、大人に従順で、自主性が乏しく、与えられた目標を素直に受容する性向であり、背後には、教育を

■図1 授業への出席率



■表1 恋愛類型  
(高校時代→現在)

		異性恋人との交際 (生活の中の比重)	
		高	低
異性と つきあった (高校時代)	した	継続型 (19.1%)	中断型 (21.4%)
	しなかった	デビュー型 (13.7%)	無縁型 (45.7%)

の高校時代は64・1%です。大学は学生の在学効果を高めるためにも、部活・サークルへの支援・方策を重視すべきだと考えます。

高校時代の経験と現在の比重を組み合わせ、異性交際を4つの類型に分けて分析したところ、「恋愛無縁型」の学生の比重が45・7%と、最も多いという意外な結果が表れました。大学に入って初めての交際を経験する「大学デビュー型」も13・7%と少なく、読書や勉強などと同様に高校時代までの「助走」が重要であると考えられます。

「大学生になって価値観が変わったか」という質問と恋愛類型をクロスすると、異性交際・恋愛を経験した者の方が、より価値観の変化を経験しています。青年期における恋愛や交際がもつ影響の大きさが指摘できます。

恋愛と学生生活については、男女交際をしている学生の方が「友人との交友」「アルバイト」「趣味」に占める比重が高いというデータが得られました。交際比重と自己意識との関係でも、異性との交際比重の「高い」学生の方が「低い」学生に比べて「毎日が充実している」(66・4%V59・1%)、「人に負けない得意な分野をもっている」(51・2%V45・5%)、「自分が好き」(63・2%V54・7%)、「何事も自分で決めないと気がすまない」(53・3%V46・1%)、

「自分が何になりたいのかを考えている」(86・0%V83・1%)と答えています。

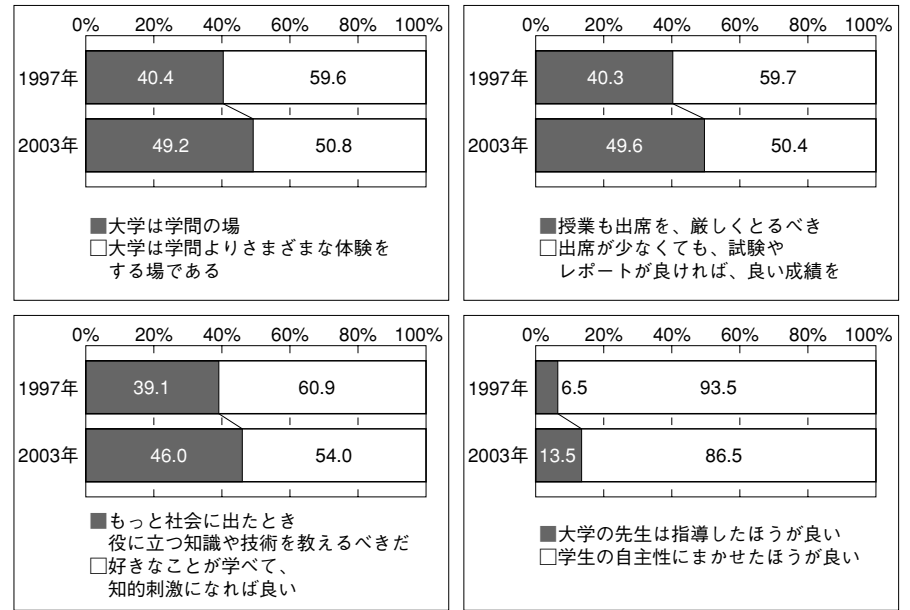
男女交際を経験している学生の方が自分に自信を持ち、ポジティブで社交的な生き方ができるようです。恋愛と勉強の両立は難しいことも多いようですが、恋愛・異性交際というのも、学生生活の充実度を高める効果を秘めていると言えるでしょう。

**アルバイトと本当の「社会勉強」**

アルバイトは短期・中期を含めると9割以上の学生がしており、職種については国立大学の学生は家庭教師や塾講師など学生の特性を生かしたものの、中堅大学ではサービスのアルバイトが多いという傾向が見られます。アルバイト先の決定に際して最も重要視されるのは「仕事内容」(32・0%)であり「時給」(25・2%)を上回っています。とはいってもの、アルバイトをする第一の理由は「小遣いを増やすため」(57・9%)です。

「社会勉強のため」(10・5%)と考えている学生もいますが、ここで、アルバイトが本来に将来の就職に生きるのだからかという疑問が残ります。サークル活

■図2 大学観



重視する最近の大学の「学校化」現象があると思います。実際、今の学生たちは「学校に行く」という言い方をし、あまり「大学に行く」とは言いません。また、学生の自由に使える時間が減少したという結果も出ていて、自由にものを考える時間があつてこそ大きな成長をするという、大学時代の本来あるべき姿が、今の大学生からは失われつつあるように思います。

自由回答を見ますと、学生が自分のことを「生徒」と書くケースが目立ちます。言われたことをそのままするのは重視する最近の大学の「学校化」現象があると思います。実際、今の学生たちは「学校に行く」という言い方をし、あまり「大学に行く」とは言いません。また、学生の自由に使える時間が減少したという結果も出ていて、自由にものを考える時間があつてこそ大きな成長をするという、大学時代の本来あるべき姿が、今の大学生からは失われつつあるように思います。

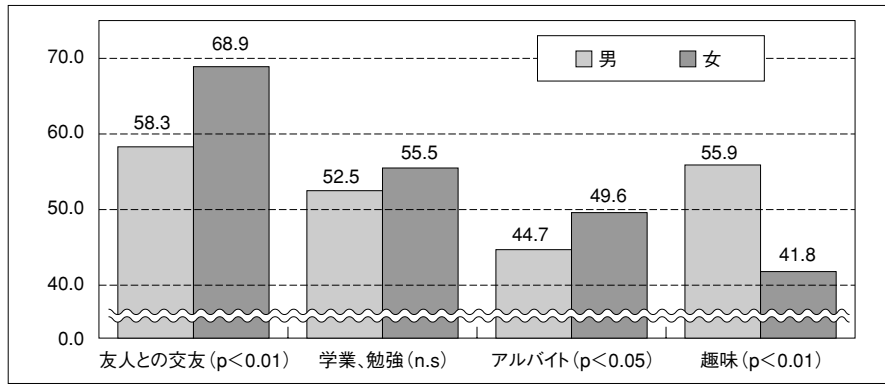
自由回答を見ますと、学生が自分のことを「生徒」と書くケースが目立ちます。言われたことをそのままするのは

「生徒」ですが、それとはまったく違う原理で学ぶのが大学であり、指示に従うのではなく、自主的に学びたいことを学ぶのが「学生」です。この転換が学生たちの中で希薄なために、彼らは「生徒」という言葉を使うのではないのでしょうか。大学の学校化は、教員側にとつてはある意味やり易い現象かもしれません。が、果たしてそれでよいのでしょうか。従来、文学部などでは授業に出席するのはよい卒業を書くためであり、従って卒業に無関係の授業への出席はどちらでもいいという風潮がありました。しかし最近では言われたことをきちんと成し遂げること重点が置かれるようになり、学生たちが従順になってきたことが、他の項目のデータからも見えてきます。

**部・サークル活動が満足度を高める**

部・サークル活動には03年では7割弱(約67%)の学生が参加しています。生活に占める部活・サークルの比重は減少し、学業・勉強の比重が増えましたが、サークルに入っている学生の方が大学生生活への満足度は高いのです。大学生生活への満足度は、部・サークル活動への関与

■図4 学生生活の重点（男女別）



調査結果を見て言えることは、現在の学生の特質には、就職難の時期の学生の教育的対応もあると思われませんが、近年の教育重視の大学改革の成果も現れているということでしょう。学生の自主的探究という大学本来の目的から考えた時、「生徒化」した大学生では脆弱化が懸念されます。大学は自由と同時に厳しい訓練の場であつてこそ、青年を大人にするイニシエーションの場として機能します。学生たちは大学の学問に学びながらも、自立性や自治を有し、教師を乗り越えることによって成長します。

潮木守一先生は著書『キャンパスの生態誌』（中公新書）で、大学の教師たちが考える理想の大学は「教師と学生が知の探求を共に目指す『知的コミュニケーション型』であろう」と書いています。「知的コミュニケーション」とは、知識を背景にしながら、教師と学生が対等に身近に抱える問題を

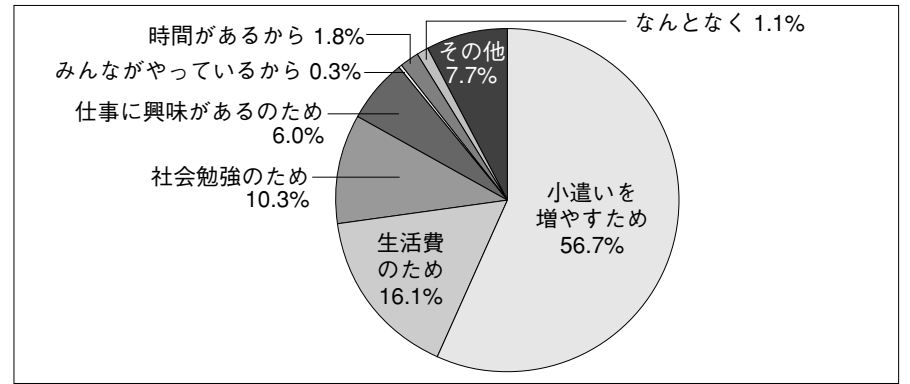
### 「知的コミュニケーション」をめざして

将来を左右されることなく、自立した価値観をもとに仕事や自身の生き方について積極的な考えを持っています。このあ

たりのジェンダー意識については、男子と女子との間に大きなズレがあると思えます。

出し合い、自分の体験や感覚を大事にしながらその解決の糸口を探ったり、学問上の新発見をめざすことだと思えます。そしてそれは、教師側の深くて広い知識と学生に対する感受性、学生側の探求心と自立性、そして教師との信頼関係があつてこそ成立します。そういう方向性を学生の実態に即しながら探り、学生の自主性を損なわない学生支援、大学改革の方策を探る必要が、さらにあるのではないのでしょうか。文科省の「特色ある大学教育支援プログラム」の報告を読むと、各大学がいろいろな努力をしていることが分かります。これらの試みがよい形で進むことを願うと同時に、そのために、さらに学生の実態把握が必要であると、私は考えています。

■図3 アルバイトをする理由



女子学生については、彼女らの方が具体的に真面目でさまざまな方面で活躍しているケースが、どの大学でも多いようです。女子学生は大学入学までに「受

女子学生—ジェンダー意識に見られる男女間のズレ

動と並び、アルバイトも学生をキャンパスにつなぎ止めているという意見には納得しますが、アルバイトに専念する学生はどうしても勉強がおろそかになる傾向があるからです。

1時間当たり3千円相当の授業をさぼり、時給800円のアルバイトをするのとにどれだけ意義があるのか。長期的に見た場合、単純作業の多いアルバイトと、未知の世界への探索や集団討議を行う大学の授業の、どちらが人間的成長を助けるのか。価値ある人間関係の構築や将来の職業選択にとつて、アルバイトは大学の授業より役立つのか。就職活動において、企業は大学の成績よりアルバイト経験を評価してくれるのか。大学や学生にとつて何が価値のあることなのかを、現実の機能の中で考える必要があるのではないのでしょうか。

生き方と結婚観を尋ねた項目では、「仕事に就き一生働き続ける」と答えた女子学生が31・9%いたのに対し、そういう女性を理想の結婚相手とする男子学生は1割しかいません。男子学生は家庭に入る女性、自分の意向や事情に合わせしてくれる女性を好む保守的な考えを持っており、女子学生は恋人の存在によって、

「読書」「アルバイト」「ボランティア」をよくしてきており、「部活動」には男子学生ほどは打ち込まなかったようですが、大学に入つて「価値観が変わった」という回答は男子より女子に多く見られました（65・9%V57・8%）。学業、友人との交友、アルバイトは女子の方が頑張っており、趣味などおたく的な過ごし方に重点を置いているのは男子学生の方が多いという結果も出ています。「自分の将来に関して不安を感じる」学生は男子より女子に多かったのですが（83・2%V77・6%）、外に出て社会的に頑張っているのは女子の方が多く、彼女らの元気な動向が大学のあり方にも大きな影響を与えていると言えるでしょう。